



Title	小学校の各学年に見られる就園児と不就園児との自由連想語彙量における発達の差異に関する研究
Author(s)	坂東, 義教
Citation	北海道學藝大學紀要. 第一部, 8(1増補): 101-106
Issue Date	1957-08
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3638">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3638</a>
Rights	

## 小学校の各学年に見られる就園児と不就園児との 自由連想語彙量における発達の差異に関する研究

坂 東 義 教

北海道学芸大学函館分校心理学研究室

Yosinori, BANDO: A Study on the Developmental Difference of Vocabulary of Free Association between Kindergarten Children and Non-Kindergarten Children noticed at Each Grade of Their Elementary Education.

### I 問題の所在

一般に、幼稚園や保育所を経て就学した就園児と家庭から直接入学した不就園児との差異は、入学後数年にして消失するものと考えられている。例えば、周郷博氏によれば、「入学の準備のための要求学習という問題から考える点では、三年ぐらいで〔不就園児は就園児に〕追いつけるのではないか。人間を形成する面からいうと、まだ差があると考えるのが正しいように思う。』<sup>1)</sup>と言つておられる。

果して、就園児と不就園児との差異は、入学後数年間のうちに消失してしまうものであろうか。この疑問を解くには、各学年を通して両者の差異を検出する調査を行う必要がある。

従来、この種の研究は殆ど——特にわが国においては——行われていないのである。就園児と不就園児との差異を、小学校の各学年にわたつて調べた報告は、幼年教育の研究に立遅れているわが国には殆ど見当たらないのである。従つて、就園児と不就園児との差異が小学校入学後、数年を経ずして消失すると一般に考えられている考えは、単なる臆説に過ぎぬものと思われる。

就園児と不就園児との差異は、入学当初では、明らかに、種々の心理的的特性において、就園児の方が優れている。このことは、既に筆者の調査においても確認されているのである<sup>2)</sup>が、かかる差異が果して何年後に消失するか、或は消失せずに増大するかも知れぬが、もし増大するならば、どのような変化が見られるかなどを調べることは、幼年教育 Childhood Education の効果を検証する立場から、或いは幼年教育の重要性を実証する立場からも、また、発達心理学的観点からも、幼年教育上、重要な意義を有するものであり、特に幼年教育の後年の発達に及ぼす影響の研究としても意義深いものである。

筆者はかかる観点から、ささやかな試みではあるが、果して、就・不就園児間の差異は、入学後数年間の中に消失するか否か、或は増大するか否かなどを把握しようと思ひ、先ずその手始めに、言語発達に見られる差異に関して、その語彙検査法としての自由連想法 Method of Free Association によつて実験的に両者の精神機能的ないし発達の差異を明らかにしてみようと思ひ立つた次第である。

即ち、この研究の目的は、自由連想法によつて、小学校の各学年に見られる就園児と不就園児との言語発達のないし精神機能的差異を明らかにすることである。

## II 研究の方法

### (1) 自由連想法

この方法は、先ず被験者にカード(横:5×縦:25からなる枠組を印刷したもの)を渡し、時間制限法 Time-limit (10分間)により、「知っているものの名前」をできるだけ早く数多く書かせるという方法である。

言語発達の研究において、語の出現頻度の調査法として、語彙の増大を調べるために、かかる連想反応法は、E. W. Dolch<sup>3)</sup>や D. A. Prescott などによつて従来行われてきたものであるが、これらの研究者の方法は、はじめに特定の刺戟語を与えるのを常とするものである。しかし、筆者は、刺戟語を与えることなく、「知っているものの名前」を重複しないようにできるだけ沢山、しかも、速く書かせるという方法をとつた。

この方法を、児童の有する語彙発達の水準を正確に検出することができるものとすることはできないかも知れないが、しかし、或程度それを反映するものと考えられている方法である。と同時に、この方法による場合は、語彙発達の要因の外に、連想機能の要因や書字能力の要因などの心理的諸要因が併せて被験者から検出されるものと考えられるところの方法でもあり、ここに却つてこの方法の妙味がある。

この方法を用いた理由は、調査費用のあまりかからぬことと、結果の整理も客観的にできること及び、短時間で大量の被験者を同一条件で測定し得ることなどの経済的ないしは方法的な理由が主なるものである。

測定期日は、昭和31年9月10日1時限のはじめ。

測定実施者は、北海道学芸大学函館分校教育実習学生。

なお、特に、この函館市立大森小学校を選んだ理由は、大森小学校は就園率から見ても、学校環境から言つても、大体、函館市の代表的な水準を示していることによるものである。

### (2) 被験者・測定期日・測定実施者

北海道函館市立大森小学校。1学年から6学年まで、各学年2学級ずつ、計600名。その内訳は、Table. 1の通り。

Table. 1 被検者の内訳

学 年	1			2			3			4			5			6			総 計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
人 数	49	50	99	53	46	99	53	47	100	49	50	99	51	53	104	45	54	99	600

## III 結果とその考察

### 1 自由連想語彙反応量に現われた発達傾向

先ず、測定して得られた資料を集計してみると、語彙量は、1年生から6年生まで次第に増大している傾向がみられる。Table. 2とFig. 1はこれを示すものである。

Table. 2 被検児童数と自由連想語彙量の学年別平均値

学 年	1	2	3	4	5	6
被 検 児 童 数	99	99	100	99	104	99
自由連想語彙量 (平均)	20.5	35.9	53.4	62.8	66.1	73.8

Fig. 1を見て判ることは、先ず①1年から3年までは顕著な発達勾配が見られるということ、次に②3年から4年にかけては勾配がゆるやかになるということ、更には、③5年から6年にかけては、再び顕著な勾配を見せていることなどである。

この発達曲線は、一応、語彙反応の発達曲線と考えられるものであるが、考え方によつては、書字能力の発達曲線とも考えられるものであり、書字速度の発達曲線とも考えられるものである。

何れにせよ、各学年の反応量を相対的に見る場合は、明らかに発達の傾向が認められるのである。

さて、この発達曲線は、言うまでもなく、就園した児童と就園しなかつた児童とのそれぞれの男女が混合されたところの児童群から得られたところのものであるが、この発達曲線の構成要因を就園児の要因と不就園児の要因とに分けてみると、次のようになる。

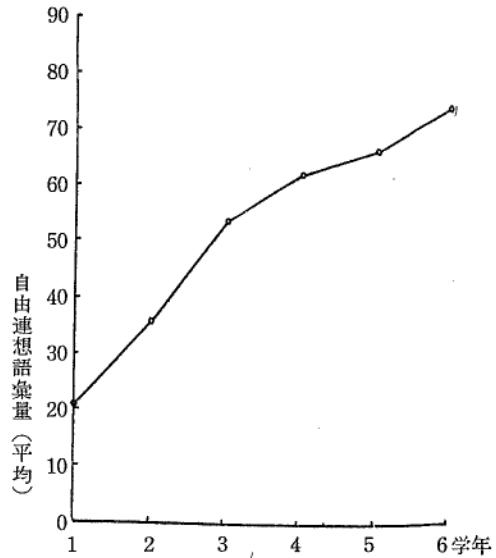


Fig. 1 自由連想反応法による語彙量の発達曲線

## 2 男女混合せる場合の就・不就園児間の差異

Table. 3を図表化したものがFig. 2であるが、Fig. 2を見てわかることは、先ず①明らかに、各学年を通じて、就園児の方が反応量において優れているということである。次に判ることは、②その両者の差は、低学年におけるよりも、むしろ高学年における方が、差は増大するというのである。更に細かに観てみると、③1年から3年までは大して差が見られないこと。④4年と5年でやや大きな差が見られること、そして⑤6年において見られる差が、全学年を通じて最も大きいということである。

Table. 3 男女混合せる場合の被検児童数と自由連想語彙量における就・不就園児の差異

学	年	1	2	3	4	5	6
被検児童数 (男女合計)	不就園児	52	52	58	64	73	62
	就園児	47	47	42	35	31	27
自由連想語 彙量(平均)	不就園児	18.5	33.5	52.8	60.6	64.5	71.0
	就園児	22.8	38.6	54.2	66.7	69.8	81.2

Fig. 2を見て、われわれが意外に思つたことは、就園児と不就園児との差異は学年が進むにつれて消失するものと考えていたことが、このFig. 2により、完全に覆えられたことである。学年が進むにつれて両者の差は縮むどころか、却つて増大している。このことは、従来のわれわれの観念を改めなければならぬ事実を提供するものである。

何故このように学年が進むにつれて両者の差は

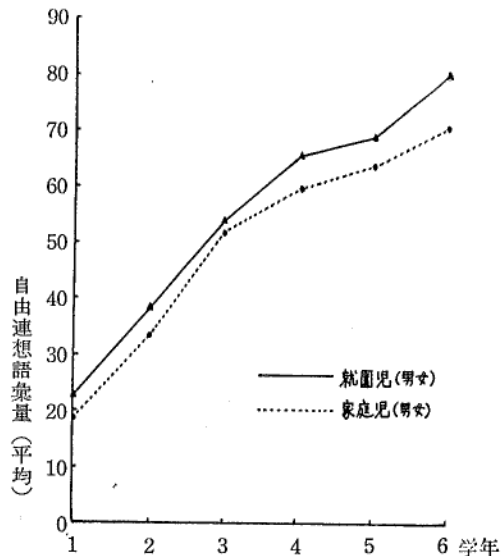


Fig. 2

増大するのであろうか。われわれの得た限られた資料からは、この疑問をすべて解くことはできないが、資料に種々の操作を加えることによつて、得られた資料の範囲内で或程度この疑問を解くことができる。

結論を先に述べると、就園児と不就園児との差が学年が進むにつれて増大するのは、就園児の男子と家庭児の男子とのひらきが学年が進むにつれて非常に大きくなるためである。このことが両者の差を学年が進むと共に大きくする一つの重要な要因をなすものであるとすることができる。

以下、この結論を検出するに至つた過程を明らかにしていつてみよう。

### 3 発達曲線に見られる性的差異

学年が進むにつれて就・不就園児間の差異が増大する現象の要因をたずねるに先立つて、一般に、性別的な差異はどのように見られるかを調べてみたところ、Fig. 3に示されているように、①男子は低学年と高学年において女子より優つており、②女子は中学年においてのみ男子より優れている、ということが判つた。概して、男子の方が優つていると言えよう。

Table. 4

学 年	1	2	3	4	5	6	
被検児童数	男子	49	53	53	49	51	45
	女子	50	46	47	50	53	54
自由連想語 彙量(平均)	男子	22.3	36.8	51.7	61.9	68.4	78.2
	女子	18.9	34.8	55.3	63.6	63.9	71.3

さて、一般的に性的な差は以上のものであつたわけであるが、もう一歩進んで、男子の発達曲線を就園児と不就園児とのに分析し、女子の発達曲線をも就園児と不就園児とのに分けて調べてみるとそれぞれ Fig. 4 及び Fig. 5 の資料を得ることができる。

### 4 男女別にした場合の就・不就園児間の差異

男子のみを就園児と不就園児とについて比較したところの Fig. 4 を見てすぐに判ることは、①学年が進むにつれて差はますます増大するというこ

Table. 5

学 年	1	2	3	4	5	6	
被検児童数 (男子のみ)	不就園児	25	27	32	33	32	32
	就園児	24	26	21	16	19	13
自由連想語 彙量(平均)	不就園児	19.7	34.5	48.9	58.8	65.6	72.0
	就園児	25.0	39.2	55.8	68.2	73.2	93.9

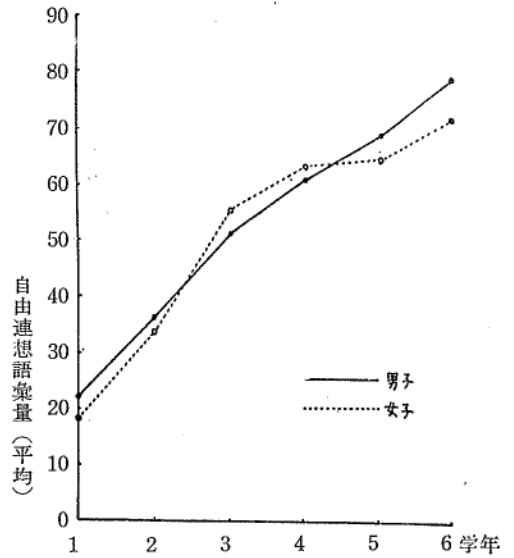


Fig. 3

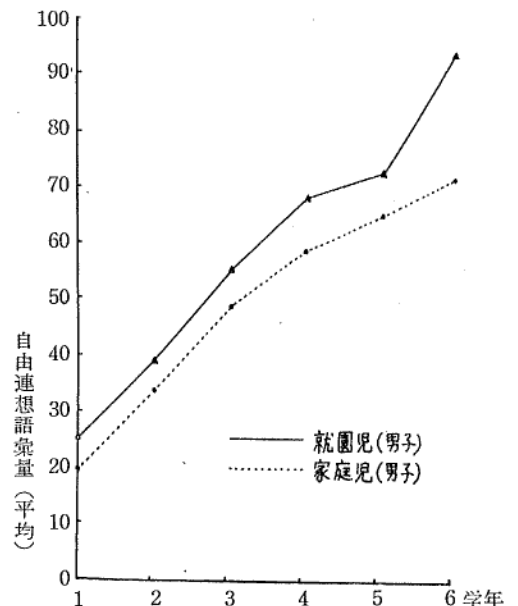


Fig. 4

と、もう一つは、言うまでもなく、②すべての学年において、就園児の方が優れているということである。

女子のみを就園児と不就園児とについて比較したところの Fig. 5 を見ると、男子の場合とはかなり様子が違っている。双方の発達曲線は2, 3年間と3, 4年間に交錯し、5, 6年間で交錯している。要するに Fig. 5 から判ることは、①全般的に言つて、就園児の方が家庭児よりもやや優つているということである。もう一つは、②就園児は明らかに低学年では優れているが、学年が進むにつれて、両者の差は減少していつているということである。5, 6年では、殆ど差がないといつてよい程である。

Table. 6

学 年	1	2	3	4	5	6	
被検児童数 (女子のみ)	不就園児	27	25	26	31	41	40
	就園児	23	21	21	19	12	14
自由連想語 彙量(平均)	不就園児	17.4	32.3	57.6	62.5	63.7	70.2
	就園児	20.6	37.3	52.6	65.3	64.6	70.0

Fig. 4 と Fig. 5 とを重ね合わせて見る場合、次のことがわかる。先ず①全体的に優劣の順序をつけると、

就園児(男子) > 就園児(女子) > 家庭児(女子)  
> 家庭児(男子)

というように表現されよう。何れにせよ、②男子も女子も就園児の方が優れていると言える。そして、③特に男子の就園児は最も優れており、最も劣つていたものは、男子の家庭児であつた。④全体的に見て、中位を占めていたのが女子である。

特に大切なことは、⑤男子は学年が進むにつれて就・不就園児間の差が増大することである。それに比較して、⑥女子では、学年が進むに従つて差が減少する傾向にあるということである。

この⑤と⑥の事象は、就園児と不就園児との差異を検出しようとするわれわれに、男女を混合にして就・不就園児間の差異を論ずることの危険性を教えてくれている。

とにかく、以上のことから既に理解し得ることであろうが、はじめに見たところの Fig. 2 の就・不就園児間の発達曲線における差異は、主として、男子就園児と男子不就園児との著しい落差が、それをもたらしているものであることが判るのである。

このことは、就園効果の研究に当るものに、重要な示唆を与えるものであろう。

就園児と不就園児との差が、男子では学年が進むにつれて大きくなり、逆に女子では次第に小さくなつていくのはどうしたわけであろうか。また、男子では、学年が進むにつれて両者の差が大きくなつていく傾向の生ずる主なる原因は、一体何であろうか。これらの疑問に対しては、この調査資料は答えてくれない。これらの疑問の解決は、今後に残された問題である。

われわれは、この調査でも、明らかに就園児の方が、家庭児よりも優れていることを知つた。しかし何故就園児の方が優れているのかという理由はこの調査では知ることはできない。しかし、就園児の方が優れていたことは確かであるのだから、そこには当然、それをもたらした数々の要因がある筈である。その要因は、就学前教育が主なるものかも知れない。或は、就園児の方が家庭環境

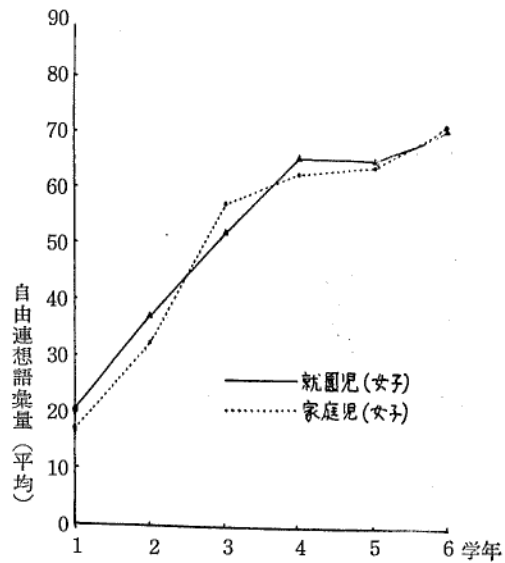


Fig. 5

に恵まれているためかも知れない。就園児の父兄の方が教育熱心であるためかも知れない。何れにせよ、こうした自由連想反応においても就園児の方が優れていたことは幼年教育者にとつてよることばしいことである。しかし、同時に、就園させ得なかつた人々にとつては決して望ましいことではない。こうした両者の落差を生ぜしめる要因を明らかにすることも、今後に残された課題であらう。

#### IV 要 約

この研究は、小学校の1年から6年までの児童600名を被検者とし、就園児と不就園児との比較を、自由連想反応語彙量について行つたものである。

研究結論は次の通りである。

(1) 自由連想反応法による語彙量の測定結果は、男女児童を混合した場合は、その就園児と不就園児との差は、学年が進むに従つて増大することが明らかに認められた。

(2) この場合、1年から3年までは、両者の差は比較的小さいが、4年と5年でやや大きな差が見出され、6年において最も大きな差が認められた。

(3) 両者の差が学年が進むに従つて増大するのは、主として、男子就園児と男子不就園児との差が、学年が進むに従い非常に増大するためであることがわかつた。

(4) 男子だけに関して、就園児と不就園児とを比較すると、これら両者の差は、学年が進むにつれて、顕著に増大することがわかつた。これに反して、女子だけについて就園児と不就園児とを比較すると、女子の就・不就園児間の差は、学年が進むにつれて減少することがわかつた。

(5) 男女混合の場合でも、女子だけの場合でも、男子だけの場合でも、或は男女の比較をした場合においても、要するに、何れの場合においても、各学年を通して全般的に発達曲線を就・不就園児間において比較する場合は、一般に就園児の方の反応量が高く、就園児の方が不就園児よりも優れていることが判つた。

(6) なお、われわれは、この実験によつて、1年から6年までの発達曲線と、性別的発達曲線とを得た。

特に、後者の曲線からは、男子は女子に比して低学年と高学年とにおいて優れ、女子は中学年において男子よりも優つていることを知つた。

(7) 上述したところの(1)から(5)までの結論の原因を追究することが、今後に残された課題である。

#### 註 及 び 文 献

- 1) 日本の教育、第三回全国教育研究大会報告、幼年期における教育の諸問題とその振興策、昭和29年、国土社、P. 186.
- 2) 入学当初に見られる就園児と不就園児との差異に関する心理学的研究、昭和32年(未刊)、昭和31年11月：日本応用心理学会(東北大学)にて発表。
- 3) Grade vocabularies. J. Educ. Res. 16, 16~26. Dolch, E. W.
- 4) 児童の行動と発達上巻、昭和24年、金子書房、P. 289.

(昭和32年4月23日記)